平新報

發行日　毎月三回　五ノ日發行
編輯兼發行印刷人　福島縣平町壹丁目六　山野邊庄吉
發行所　平新報社
廣告料　五號十二字詰一行一回五十錢　場所指定倍增
一部定價金拾錢　送料五厘

『磐城平藩儒者櫻關室直養傳』刊行趣意書

（出版義損金募集に就いて急告）

一、本會の成立所以と目的

近世、磐城平藩主安藤信正（隱居後鶴翁と號す）の儒臣櫻關は、其の次主信民、信勇、信守等に至る、四代に仕へて專ら匡翼の任に膺り、主の往く所必ず櫻關の在らざるはなし。兼ては藩政の大綱に參與し、又佑賢堂を中興して磐城六藩（平、中村、三春、守山、泉、湯長谷）の最高儒府と爲し、學生を訓敎して幾多有爲の人材を輩出せり。次いで戊辰役の起るや、圖藩の副使となり、白石、仙臺、福島等に會して、奥羽、北越三十三藩の重大議に臨み、畢竟抗盟の盟約に加はると雖も、爾來鶴翁（城主信勇は上京不在）を曉諭して、主戰の不可を辨じ、恭順を誨へた事に資せんとせるの士は櫻關其の人の先覺を措いて、他に匹壽するもの無かるべし。是れに於いてか吾人は鶴翁に降伏を勸めて遂に歸順するに至り、罪に因つて屏居、朝裁を待ち、櫻關も亦之が責を負うて謹慎し後ち之を宥されるや、明治新政府は櫻關の人と爲りしを知り、退老の齡にもかゝはらず强ひて再び儒官、公議人、權大參事、文學大總括等の要職に擧用せり。惟ふに櫻關は夙に朱子學より更に皇學を奉じ、是れを以て經世の治國の根元となし、常に尊したく、時恰も國家非常の秋に際し、かゝる擧は鄕土の爲、徒らに强引、附會して往々誤述に陷いるを例とするが、本傳は專ら史實に立案して、擧證を別註し、行文亦簡潔を旨とし、即ち一の論文の編述法を執り、苟くもせざるを主とせり。

二、本傳著作上の用意周到

一、本會は嘗て昭和五年一月、室櫻關先生の言行事歷を著作して、博ろく社會に顯彰するべく組織し、其編述に就いては、始め草野順平、諸橋元三郎、諸根樟一の三人を擧げて託し、專ら之に從事せしめたり。

二、爾來草野、諸橋氏等は鄕士に於ける參考資料の發見、蒐集を分擔し、諸根氏は中央に在つて之を分擔し、諸根氏常に帝國大學史料編纂所（今尙之に在つて研究）に就いて全國の史料を參見し、或は水戸彰考館、上野圖書館、磐城舊三藩主家、磐城戊辰戰爭出兵の諸藩家記等に閲覽し、本傳に關係せる史料を周ねく採訪して之が正鵠を期すに務めしむ。（後ち草野、諸橋兩氏辭任）

三、故に本傳の著作は實に約四ヶ年の歲月と相當の支出を要し、昨年十二月に至つて遂に之が脫稿を得たるものなり。されば從來の磐城地方に散見する杜撰極まる時なり）紀念として、本傳の所謂傳記上の人物志の類とは、聊か其の種類を異にするものとす。

四、世の人物傳の多くは、其の面目を彌が上に讃揚す

五、義損金募集締切は本年二月末日限りとし、又本傳發行は本年三月中とし、目下印刷中なり。

× × ×

四、發起人及刊行委員

（平町）本會代表者刊行委員長　青沼鋒太郎
同　山崎與三郎
同　諸橋久太郎
（平町）　花澤文庫
同　加藤夫丈
（內鄕村）　本多忠綱
（泉村）　小林臧次
同　吉田正愛
同　小野晋平
（小名濱町）　多田井笑次郎
（平町）　廣田德行
同　大和田豊吉
同　杉山勇馬
（磐崎村）　酒井良平
（大浦村）　酒井嘉藏
（磐崎村）　長壽男
（神谷村）　佐藤久三郎
同　田子勝彌
（東京市）　草野常彌
（平窪村）　松崎松治
同　佐々木龍若
（平町）　賀澤忠治
同　大平睦四郎
（勿來町）　飯野盛男
（東京市）　山野邊庄吉
（平町）　田村顯允
同　草野順平
（郡山市）　諸橋元三郎
（平町）　諸根樟一
（東京市）　（順不同）

編纂顧問（幷ニ題字御執筆者）

舊平藩主子爵　安藤信昭閣下
舊泉藩主子爵　本多忠晃閣下
舊湯長谷藩主子爵　內藤政憲閣下

昭和五年一月（昭和九年一月再發）

福島縣平町舊城跡十二番地（電話四〇三番）

室櫻關先生傳刊行會　謹識

編纂所　同縣同町五丁目六番地三猿文庫內
（電話九番及九九番）

猶ほ刊行委員を交渉及び推薦中の士あるにつき追て掲記す。

平町田町　電話五一三番
高久病院

磐城セメント代理店
西村屋藥舗
平町二町目（電話貳三番）

吸入用酸素
純度99%

衡量器
モノサシ
マス
ハカリ

計量器
体温器
寒暖計

關內藥局
電話四〇番

產婆看護婦生徒募集
非常時の女性に自力更生の近道を志すならば……
產婆看護婦に
ならん事を御奬め致します
それには成績最もよいと定評のある……
平南町　平產婆看護婦學校へ
御入學なさる事が一番早道かと思ひますどうぞ御入學下さい
一、申込は成るべく早く
一、新學期の開始は四月八日より
一、開始後と雖も隨時入學が出來ます
平南町　平產婆看護婦學校
校長　清野キヨ　電話三〇七番

內科、小兒科、
藤沼醫院
平町紺屋町　電話五〇七番
◎入院應需

磐城平藩儒者 櫻關室直養傳

（內容總目次）

諸根樟一著・室櫻關先生傳刊行會發行

（圖版目次）

勿來關懷古の保詩碑八一
（題簽櫻關先生後嗣室直與八十八歳の書）
一四縣社飯野八幡神社境內の櫻關頌德碑……九
一磐城平室家定紋（鳩酸草花の章）表紙の金色一所出
一五大寶寺塋域の櫻關夫妻墓……九
二櫻關鄉土に退老の圖（勿來關址を經過する想像畫、關雪巖の筆……一〇
表見返所收
一六後嗣直與に賜ひし伏見宮貞愛親王の令旨（奉書者は男爵三好成行）……一〇
三舊磐城平藩主子爵安藤信昭題字……一
一七直與最近の眞蹟昭和八年八十七歳の書）一〇
一八同人の近影（同年三月の撮影に據る……一〇
四舊泉藩主子爵本多忠晃題字……二
一九櫻關終焉の居家たる臥雲山房の圖（關雪巖の鶴翁の子五萬石の內二萬石を削地—天死—信勇は養子—遺寫生圖）……裏見返所收
五舊湯長谷藩主子爵內藤政憲題字……三
六室家所藏の古文書五通（足利家給人連署施行狀、貞忠御內書、尼子晴久感狀、伊賀久隆感狀、同人判狀、室直溫覺書）……四
七櫻關の肖像（櫻關詩鈔上卷所載）……五
八櫻關の授與されたる長の父直宜信由に勤む—「註」沼流兵法許可狀……六
九明治維新政府の櫻關就任辭令三通（儒者、公卿、議人、權大參事）……七
一〇權大參事當時の櫻關自署と花押……七
一一櫻關勿來關懷古の詩書……八
一二子爵難波宗虔揮毫贈與の櫻關の二字（後ち之を石詩碑の額に用ふ）……八
（本文目次）
一朝鮮使節來聘の御用と爲る—若年寄に進む—御應御用掛—講武所其他の取扱—老中に陞る—四位に叙せらる—侍從に任ず—明治帝御老中に陞る—四位に叙せらる—侍從に任ず—明治帝御
一　櫻關先生後嗣室直與八十八歳の書
二　櫻關鄉土に退老の圖（勿來關址を經過する想像畫、關雪巖の筆
三　舊磐城平藩主子爵安藤信昭題字
四　舊泉藩主子爵本多忠晃題字
五　舊湯長谷藩主子爵內藤政憲題字
六　室家所藏の古文書五通（足利家給人連署施行狀、貞忠御內書、尼子晴久感狀、伊賀久隆感狀、同人判狀、室直溫覺書）
七　櫻關の肖像（櫻關詩鈔上卷所載）
八　櫻關の授與されたる長の父直宜信由に勤む—「註」沼流兵法許可狀
九　明治維新政府の櫻關就任辭令三通（儒者、公卿、議人、權大參事）
一〇　權大參事當時の櫻關自署と花押
一一　櫻關勿來關懷古の詩書
一二　子爵難波宗虔揮毫贈與の櫻關の二字（後ち之を石詩碑の額に用ふ）
一三　菊多剡擬陉に建てたる櫻關の梵鐘を大炮、小銃に鑄換—天死—信勇は養子—遺領を賜ふ—元治の亂に追討の兵を出す—養父鶴翁の謹慎—舊町邸を他所と代へる—其役の賞賜—諸村替地京師の騷擾と其出兵—戊辰の役東山道官軍美濃支領を一時收む—信恭入覲せんと始めて安藤家に仕ふ—櫻關の父直宜信由に勤む—「註」す—信勇勤王の爲參朝—討幕追討平潟口開戰—二、直員始馬守に任ぜらる—美濃の封土を復す—平落城—信勇父子の謹慎と永蟄居—移封—信勇歸京す—謹慎を解かる—格別の思召を以て磐城平藩に復歸—平藩知事に任ぜらる—龍顏を拜す—鶴翁の永蟄居を解かる—信勇任地に赴く—東京に貫屬—鶴翁の子信守襲ぐ。
三　彼の儒道及書法幷詩學
一　少年時代前後の薫陶
二　水戸、江戸の遊學と師たる人々
二　室家の武道と平藩の弊風刷新
二　長沼流の兵法を兼修す
四　武術傳統家の室氏と櫻關の兵學
五　藩校施政堂を中興して佑賢堂と改稱
六　水戸朋黨の亂と彼れの出師
一　幕府磐城平藩に追討を令す
二　陣中に於ける自筆の（常役日記）
七　信濃內藤氏の岩村田城を創定
八　磐城戊辰戰爭と櫻關の勤王
一　德川幕府の瓦解と各所の反亂
二　奥羽鎭撫總督府の會津、莊內征討
三　奥羽、北越諸藩の同盟と其前後形勢
四　九條總督羽遷後の白河口戰概況
五　輪王寺宮の奉戴と仙臺追討平潟口開戰
六　磐城三藩の陷落と神谷陣屋の危孤
七　鶴翁、忠紀、政養の北走と歸順
八　三藩主の幽閉と其朝裁比較
九　櫻關の白、仙、福、の參會と非戰固持
九　自記に見はれた平藩出仕事歷
一〇　磐城平藩より磐前縣への在官
一一　維新初政の展開と舊磐城三藩
二　舊磐城平藩の變革と櫻關の重任
一一　櫻關晚年の歸去來と終焉
一　退老後東京、鄉土に復び文敎に報す
二　窮迫を溫む子弟の情誼と逝去
一二　死後の頌德、追敬、保詩
一　飯野八幡神社境內の（櫻關室先生碑）
二　詩儒としての追敬文と肖像記
三　勿來關懷古詩を菊多剡擬陉に建碑
一三　遺稿と其燒失、散佚、貸亡
一　室家藏書中の關係文書と殘篇
二　櫻關詩鈔（直與及神谷氏與原輯）
（附錄）養嗣直與の略傳
一　八十八年の現生と其要約
二　戊辰前の直與—父子相紹いで磐城の文政に貢獻—彼れの風丰—隱れたる功績—將來の補述を希む。
三　明治以來の官公關係記錄
一　明治時代（自七年至四十四年）
家祿奉還願—其後の生計—磐前縣傳習學校卒業—二等授業敎師任命福島師範學校小學敎師講習—奬學費を寄附す—二郡書記と爲る—二郡勤務勉勵慰勞金下賜—新道開修に寄附—拾四ヶ村の聯合會議員に登選—小川江筋會議員—六郡聯合會議員—平窪村會議員—新道開鑿工事監督依囑—用係に就任—小川江水利土功會議員—三十二ヶ村聯合會議員に選定—新講す—室家の養子と爲る—高松藩儒者菊池氏に就く—同藩士松本、神谷氏等に學—斯道盡瘁の功勞狀を受く—戊辰の役王師に抗して實戰す—佑賢堂の學生を誘掖—磐城平藩政廳より擊劍圖研究上の諸本—熊谷直實に出づ—室氏の祖—忠直足利尊氏に仕ふ—直克山名氏に招がる—義直赤松氏に應振興を謀る—始めて小學校の敎師を拜命—奬學費を寄す—直弘備中の數邑を領し—大日本武德會茨城支部委員—茨城中學校創立に盡力し且劍道部師範に從事すること十二年—大日本武德會平支部評議員—同會の審判係—大日本武德會第二十回武德祭に見伏宮より令旨を賜ふ—同副會長三好男爵の謹寫狀—多年武道に貢獻すること偉大—大日本武德會に出試し表彰狀を受く—安藤子爵より高齡記念盃を贈らる—久邇宮より御盃を下賜る—大日本武德會茨城支部大會の審判員を囑託—八十七年述懷の詩—磐城劍道會米壽祝賀幷最後の囑託辭令—米壽祝賀幷多年の功績狀授與。
三　閱歷年表（自弘化四年至昭和九年）
直與生る—同藩儒室櫻關
系譜
一　磐城平室氏證據として古文書
平及白河の室家、分家の證據史料—足利家給人の連署—貞忠音物謝狀—尼子晴久書狀—伊賀久隆書狀—室直溫覺書。
二　磐城平室家所傳の系圖
當家の眞祖は直一—室系圖研究上の諸本—熊谷直實利尊氏に仕ふ—直克山名氏に出づ—室氏の祖—忠直足に招がる—義直赤松氏に應—直弘備中の數邑を領し—直與生る—同藩儒室櫻關
系
（本文目次終）

音信交換

海外生活に既に拾有四年を過し然も未に志を成し得ず慚愧に堪へざる次第に候さりながら近き將來に於て年來の御厚誼に酬ひ得るを信じ鋭意其事業たる印刷業（主に白人商社を顧客とす）と邦字新聞の經營に專心罷在候間乍憚御放念相成度候當地方に御用だも有之候はゞ遠慮無く御申付相成度候年末筆貴下御一統樣の御健祥を祝福捌筆仕候　敬具

昭和九年一月一日

在新嘉坡　古口賢